

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

ホームページで「講演動画」公開中!

ニッケ教育研究所 ビデオギャラリー

特別
講演

「第2弾 親子のふれ合いを通して深める学び」

講師 森川 正樹 先生 《関西学院初等部 教諭》

笑顔で明るくて、子どもたちが話しかけやすい! 大人たちがそんな存在になり、環境をつくるのが大切です。会話やふれ合いを通して子どもたちと一緒に学び、互いに深めていくことの素晴らしさを実感できるお話です。

スマホから、ご視聴いただけます

身近な教育の話題をとりあげた「コラム」も随時更新しています。ホームページを是非ご覧ください!

詳しい内容はここから
<https://nikke-edu.org/>



一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか? 子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記



「人は人でしか磨けない」という言葉があります。これは、人との交流を通じて「気づき」が得られ、自分との対話の中で自分が変わっていくことだと考えています。時には励ましの言葉をもらってもう一度チャレンジしようと思ったり、時には厳しい言葉をもらって今の行動を変えようと思ったり、他の人の想いを受け取ることで自分の中で変化が生まれてきます。このような良い交流を重ねるには「信頼関係」が必要です。「この人は私のことを思って言ってくれているのだ」と感じていればその人の言葉が心の中に届きます。「信頼関係」を築くには相手の存在や思いを「認める」ことから始まります。相手の話を笑顔で相槌を打ちながら聴いていると、相手は話をするのがどんどん楽しくなってきます。時々、こちらが疑問に思ったことを質問すると、考えが明確になったり新たな気づきが生まれたりします。このような良い交流を子どもたちと重ねていきたいと思えます。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



2022 冬号 (年4回発行) No.8
2022年1月20日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町3丁目3-10
TEL: 06-6205-6665 <https://nikke-edu.org/>

特集

私がつくる子どもの笑顔 第4回
子どもたちの輝く笑顔は言葉の力から

コラム
集団における被服の機能
～着装規範について考える～

教育環境を考える
教育環境は“3層のゆりかご”

インフォメーション
心に届けるおすすめコンテンツ

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな創意工夫が行われています。「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの考え方や具体例を紹介していただき、子どもたちを育む学校環境についての意識を深めていきます。第4回は、大阪市立高殿南小学校の清岡延吉校長です。

第4回

子どもたちの輝く笑顔は言葉の力から

きよおか のぶよし
《大阪市立高殿南小学校》 清岡 延吉 校長



高殿南小学校は、大阪市旭区にある全児童数197名の小さな規模の学校です。私は校長として2013年度に着任し、現在9年目になりますが、これまで子どもたちの輝く笑顔のために取り組んできたことについてお伝えしようと思います。

オンリーワンの教育を！

どの学校にも、運動の得意な子ども、「すごいな」と感心するような絵を描く子ども、読書が大好きな子ども、ダンスがとても上手な子ども、ドラムの演奏がうまい子どもなどがいますが、すべての子どもたちにその子ならではの良さや持ち味、可能性など、輝くものがいっぱいあります。本校では、こうした一人一人の良さや持ち味を引き出し、将来様々な分野で活躍できる「オンリーワンの教育」を学校の運営方針に位置付け、特色ある活動を推進しています。

一方で、昨年来の新型コロナウイルス感染症拡大により、幾度となく緊急事態宣言が発出され、まん延防止等重点措置が繰り返されています。それぞれの学校では、「感染症防止対策」と「学びの保障」の両立に向け、授業や行事をはじめとする日々の教育活動を工夫しながら安全・安心の学校運営を行っているところです。そのため、残念ながら「オンリーワン」の教育の一環として行ってきた活動で実施できなくなったものもありますが、やり方を変えるなど、創意工夫しながら取組を継続しています。

子どもに確かな言葉の力をつけるために

本校は、国語科の校内研究に7年間取り組んできました。2018年度からは、大阪市教育委員会より国語科学力向上推進モデル校（現在の学力向上推進校）の選定を受け、教員の更なる指導力・授業力の向上に取り組んできました。よく、「教師は授業で勝負する」と言われます。子どもたちにとって、「やさしい先生」「一緒に遊んでくれる先生」ということだけでなく、「授業できちんと教えてくれる先生」に人気があるというアンケート調査結果からも伺えるように、子どもたちは、「できる」「分かる」「楽しい」授業を望んでいます。それを叶えることが、当たり前のことのように、子どもたちの輝く笑顔のためには大切なことだと言えるでしょう。



そこで、より良い授業づくりを目指し、子どもに確かな言葉の力を育成するために、次のような研究主題を設定して国語科の研究実践に取り組みました。

【研究主題】

言語活動の充実を通して、思考力・判断力・表現力を高める
～交流を通して、読んだことを交流し、深い学びに向かう国語科の授業づくり～
＜令和2（2020）年度＞

また、どのように研究を進めていけば良いかを考える上での道標となるものとして、次の4つの研究の視点を設定しました。

【研究の視点】

- ①教材分析と新たな読みを拓く発問の工夫
- ②自分の考えを自分の言葉でしっかり説明する
——「解答者」から「説明者・説得者」へ——
- ③交流の活性化を通して、読みを共有する
- ④基礎・基本となる言葉の力を身に付けさせるための工夫
——獲得語彙を増やし、活用する——

研究の成果

物語や説明文を読む国語科の授業では、子どもが自分の考えを発表したときに、「どこにかいてあるの」（根拠）や、「どうしてそう考えたの」（理由）と教師が問い返し、子どもが考えを自分の言葉でしっかりと説明できるように指導を積み重ねてきました。その結果、根拠となる叙述を基に、理由を明確にして、自分の考えをまとめて発表する（主張）という「根拠・理由・主張」の3点セットの思考スタイルが身に付いてきました。

また、子どもたちが考えを交流するときには、「何のために交流するのか」（目的意識）、「誰と交流するのか」（相手意識）、「どのように交流するのか」（方法意識）という意識をしっかりと持たせました。そして、ねらいや交流内容に応じて、ペアやトリオでの交流、グループ交流、全体交流という学習形態を取り入れてきました。その結果、書いたものを基に自分の考えを伝えるだけでなく、互いに相手の考えを聞き、問い返すことができている場面が増えてきました。聞いて応じる力が少しずつ身に付いてきて、双方向の交流ができるようになってきたと考えています。

研究通信の作成

本校では、研究・研修部長の教員が研究通信を作成しています。これを読むことで、研究討議の内容や指導助言、今後

本好きな子どもを増やそう

「読書は心の糧」「読書は心の栄養」という言葉があります。子どもの頃から読書に親しむ習慣を付けることによって、将来、愛読書を得たり、座右の書などに会って人生に深みを与えることがあると思います。

令和2（2020）年度大阪市小学校学力経年調査の児童質問紙調査の中の、「読書は好きですか」の項目に対して、「当てはまる」（「どちらかといえば、当てはまる」は含めない）と回答した本校の児童（3年～6年）の平均は、53.5%で大阪市平均の41.3%よりも12ポイントも高い結果となっています。是非、小学生のうちにいろいろな本を読み、読書の大切さやすばらしさを学んでほしいと思います。

2018年度からは、学校図書館担当の教員を中心に図書

ウェルビーイングとSDGs

OECD（経済協力開発機構）は、子どもたちが成人として社会に出ていく2030年を見据え、教育での共有ビジョンとして、ウェルビーイング（well-being）に価値を置くことが求められるとしています。ウェルビーイングとは、「健康で安心なこと」「生き生きしていること」「心身ともに幸せな状態であること」と考えられていますが、このことから、教育は人を幸せにするためのものだと言えます。また、学校がウェルビーイングを実現するため

おわりに

これまで、子どもたちの輝く笑顔のために様々な取組を行ってきました。今後、学校の主人公である子どもの声にもっと耳を傾

さらに追求したい課題を振り返り学ぶことができます。こうした取組を通して、子どもたちが身に付けた言葉の力を他の教科や学校生活、日常生活にどんどん活用していけたらと思います。

取り組んだ例

1年の教室に掲示している「交流の言葉」（ペアで交流したときに聞いて応じる言葉の例）

「交流の言葉」

- ・ うんうん
- ・ そうだね
- ・ ヘー そうなんだ
- ・ おなじだ
- ・ ここがちがうかなあ
- ・ それって、～ということ？
- ・ こうしてみたら？

2年の帰りの会でのスピーチの話題「もしもシリーズ」（①から④のくじを引いて、スピーチをします）

「もしもシリーズ」～みじかいお話を作ってほっぴょうしよう！～

- ①朝おきると、きゅう食ちょうりいんさんになっていました。
- ②家に帰ると、家がおかしの家になっていました。
- ③朝おきると、校長先生になっていました。
- ④朝、とう校したら、うんどう場がゆうえん地になっていました。



館支援ボランティアの方を募集しています。「はっぴーSUN」という愛称のもと、本の貸し出し・返却・整理・修繕、掲示物の作成などの活動に取り組んでいただいています。昨年度の読書週間では、読書クイズをビンゴカード形式で実施しました。本年度は13名のボランティアの方によって、子どもたちがしっかりと読書に親しむ環境をつくっていただいていることに感謝しています。

には、SDGs（持続可能な開発目標）の理念である「誰も置き去りにしない」ということを意識していなければなりません。そのためには一人一人を大切に、「オンリーワン」の教育を推進することが重要だと考えています。そして、子どもたちが活躍し自尊感情を高めていくためのコミュニケーション力を付けるために、言葉の力を伸ばす取組を継続して行っています。

け、子どもの思考やアイデアを学校づくりに生かしていきたいと考えています。

教育環境は“3層のゆりかご”

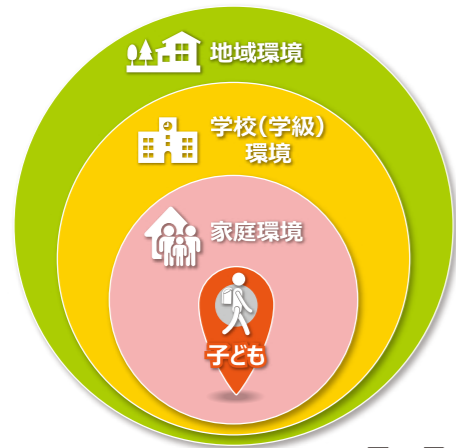
子どもたちが夢を描いてチャレンジし、思う存分に力を発揮できるようにサポートするのは大人たちの大切な役割です。ここでは2021春号・秋号に続き、子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる「教育環境を整える・つくる」ということについて、教育現場での知見に基づいて掘り下げていきます。



学校は、家庭・地域の「羅針盤」

かつもと たかお
《ニッケ教育研究所顧問》 勝本 孝夫
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

春号・秋号に続き、教育環境は“3層のゆりかご”というテーマで話をさせていただきます。春号では、学校は、家庭と地域がどの方向へ進めば良いのかを示す「羅針盤」としての役割を担っていると述べました。



図：3層のゆりかご

この図が示すように、学校（学級）環境は家庭環境と地域環境の間に位置しています。つまり学校には、保護者・子どもと地域の方々をつなぐ使命があるのです。この使命を果たすためには、家庭や地域の状況を肌感覚で掴み、一方で教育の大きな流れを捉えることがとても重要になってきます。

自転車に乗って

—— 教頭先生、今朝は自転車で地域を回ってきますので、朝の校門での立ち番をお願いします。

—— 了解しました。校長先生、行ってらっしゃい。

私が小学校の校長を務めていた頃、私は週一回程度、朝の校区内を自転車でまわり、登校の様子を見ることにしていました。登校時の子どもたちや保護者・地域の方々の様子を肌で感じることは、子ども中心の学校づくりをしていく上で、とても大切なことと考えてきました。「あの子は、いつも登校班から一人遅れて歩いている」「このお母さんは、いつも我が子のことが心配なので、学校近くまで一緒に付き添っている」

「この交差点でいつも安全旗を持っている地域の方は、満面の笑顔で子どもに接してくださっている」等々。子ども・保護者・地域の方々の様子を、毎朝“リアルタイムの旬な映像”として私の心に焼き付けてきました。



シンク グローバリー アクト ローカリー Think Globally, Act Locally.

この言葉は、「地球規模で考え、地域で行動せよ」という意味で、環境問題解決へのスローガンとして広く使われているものです。私は、この言葉は教育現場でもあてはまると思ってきました。なぜなら、学校は、今の教育状況の流れを射程に据えながら、地域の現状・特質を生かして、家庭と地域がどの方向へ進めば良いかを示す役割を担うと考えるからです。そして、地域の“リアルタイムの旬な映像”をもとに、具体的な取組を起こしていくことが、地に足の着いた教育実践につながっていくと確信します。

グローバル ローカリー Globally と Locally のバランスから

教育課題によっては「Think Globally, Act Locally.」もあれば、「Think Locally, Act Globally.」の場合もあります。つまり、「より良い地域を築くためには、その地域をとりまく周りの環境世界を変えていく」というアプローチの仕方もあるということです。学校は、この2つの観点のバランスを保ちながら、子どものための学校づくりをより良い方向性へと高めていく「羅針盤」であり続けたいものです。



集団における被服の機能 ～着装規範について考える～

《ニッケ教育研究所顧問》 いちかわ しょうこ 市川 祥子

甲子園大学 心理学部 現代応用心理学科 専任講師、博士（学術）



私たちは社会生活を送る上で、「ウチ」と「ソト」の顔を使い分け、TPOに合わせて被服も選択します。それは自身の帰属集団において、そこから逸脱せず、自身をとりまく社会に適応するために必要な社会的スキルであるとも言えます。場に適した被服を選択することは自分の居場所を確保するための一種の自己防衛でもあります。

集団には公的集団と私的集団、フォーマルグループとインフォーマルグループという捉え方があります。公的集団・フォーマルグループは意図的につくられた集団であり、学校は元来これに相当します。一方、私的集団・インフォーマルグループは、学校や学級内などで仲の良い友だち同士が集まってできる自然発生的な集団です。学校集団は公的集団の中に複数の私的集団を含んでおり、両機能を持ち合わせた非常に複雑な構造をしています。公的集団・フォーマルグループにおいては明確な規範が存在することが多く、常に従うべき基準として扱われるため、そこに所属する我々は迷うことなくその規範に従っていればよいことになります。規範がない場合に比べ、ここでは自身の行動の指針になる情報が明確に示されるため、自らが全てを決定しなければならないという心理的負担は軽減される可能性が高いと言えます。

一方、私的集団・インフォーマルグループの場合、複雑な人間関係の中で何らかの規範が自然発生的に出現し、私たちはそれらを「雰囲気」として感じ取り、その集団に適応するための規範として従うべきという同調圧力を感じるようになります。被服に関してもそのような同調圧力がある中で、過度な逸脱を避けつつ帰属集団に上手く馴染む被服を選択しますが、状況次第ではその選択に大きな心理的負荷がかかることが推測されます。なぜなら被服選択は社会的認知とも深く関わっており、どのような装いをしているかによって、その社会的評価に影響を及ぼすからです。しかも、私的集団・インフォーマルグループは、そもそもそのような規範のない集団として発生しており、そこで自然発生的に生まれた規範に明確な基準はなく非常に曖昧なものであるため、どのような規範であるのかは、自らの洞察力や分析力でもって見極めなければなりません。このように、明確な意図に基づいて作られた集団ではないところに所謂守るべき規範が発生することは、自由であるからこそ不自由とも言えます。その心理的負荷は、予め定

められている規範に従うよりも大きなものになる可能性があります。

このように考えると、学校において明確な規範が示されない自由な被服選択は、個人の嗜好や価値観に委ねられているように見えて、実は公的集団・フォーマルグループであるという前提が重要になります。学校は公的な学びの場である以上、誰が決めたわけではないしろ、その被服選択に本当の自由はありません。更には、公的集団に内包される私的集団においても自然発生的な規範が生じる可能性が高く、その私的帰属集団における他者の目、他者からの評価を意識した選択にならざるを得ません。学校集団においては、他者からの目を意識しない被服選択をした場合、その基準は公的集団と私的集団両方の基準に照らし合わされ、より一層陰湿な形で他者から評価される可能性があるのです。その結果、公的集団でも私的集団でも、「黒い羊」としてみなされてしまうこととなります。要するに、学校という場においては、公的集団における規範と私的集団における規範のいずれも満たすものでなければならず、自由選択であるが故に発生するダブルスタンダードによって評価されてしまうことになるのです。

被服は一瞬にしてその視覚情報が認知され、1人の人間の印象を形成します。一瞬だからこそ、その分慎重にならざるを得ず、その選択は自由であれば自由である程、目に見えない規範を探し求めることになり、その規範への同調は、集団での人間関係に影響を及ぼします。そして、自らの選択に責任を負い、他者との関係、社会との関係にも責任を負うことになるのです。自由であるが故の責任は思った以上に重いのです。

人間関係の混乱は、集団そのものの混乱とも言えます。被服は、個人の価値観やライフスタイルを手軽に反映できるものではありませんが、それらを重視する昨今の世の中の動きによって、学校が従来の機能を失いつつあることが懸念されています。社会心理学の研究では、教員を対象に学校制服への意識を調査した結果、制服の着用が「規律を正す」機能を持っていることも明らかにされています。集団規範という観点から考えた場合、ダブルスタンダードが発生し得る学校においては、学校制服は実に理にかなったものであると言えるのかも知れません。

